

ぼくとハムスターのハムト

五年 今井悠斗

「ハムト、死んだ。」

ぼくが学校から帰ると、おばあちゃんはぼくの顔を見ないで、台所で何かを切りながら言った。すぐゲージを見に行った。ハムトはいつものように綿と木くずに囲まれて寝ていた。「ハムト。」と声をかけた。いつもならばぼくが声をかけるともぞもぞ起きてくるのに。

「ハムスターは冬眠する事もあるから、温めて目を覚ますのを待っているんだけど。」と、お母さんが言った。

そういえば、毎朝ぼくの声でえさを食べていたが、だんだん朝寝ている事が多くなってきていた。でも、声をかけても今朝は寝ていると思うってえさと水を交換して学校に行った。今までは学校から帰って来て声をかけると、必ず起きてきてくれたんだ。今日はいつまで待っても起きてこなかった。その日の夕方、お母さんが

「もう、これ以上温めてもハムトがかわいそうかもしれないね。」と、言った。死臭がしていた。

「ハムトは幸せだったよ。悠斗がいっぱい世話をしてあげたから。ゲージをきれいに掃除をしてあげたり、ダンボールで遊び場を作ったり、いろんなエサをあげたり、おもちゃで遊んであげたりしたから。ハムトは楽しかったしうれしかったと思うよ。もう、ゆっくり休ませてあげようね。ハムトは楽しい思い出を沢山くれた。ありがとうって言ってあげよう。」と言われた。

おはかを作る事にした。玄関の近くに深く穴を掘った。寒くないように木くずをいっぱい入れた。いろんなエサを入れた。ハムトを寝かせて木くずをかぶせて土を入れた。花を植えた。

いろんな事を思い出した。

「ハムト。」と声をかけるとすぐ木くずの下から顔を出した。ぼくになついて手の平に乗った。ぼくが作ったダンボールの遊び場で遊んでくれた。ハムトは、ぼくの声を知っていた。それは、ハムトがゲージから逃げていなくなった時のこと、朝からお母さん達がずっと探したのに見つからなかった。エサのふくろを鳴らしたり、名前をよんだり、たなやテレビの後ろや台所などを覗いたりしたがどこにもいなかったそうだ。でも、ぼくがハムトの名前をよんだらすぐ台所の間からチョコチョコぼくの足元に走って来たんだ。お母さん達は半日探して、とっても疲れたと言った。

ハムトの事を色々思い出して涙が止まらなかった。いつまでも泣いていたら、

「そんなに泣くと目がはれちゃって明日学校へ行けなくなるよ。」と、言われた。

あの日から、ぼくは学校へ行く時と帰って来た時、ハムトのお墓にあいさつをしている。ぼくの声、きくとハムトに届いている。ハムトはぼくの声を知っているから。

いつまでも大好きだよ。ハムト。